

メディアセミナー 黄熱の流行と日本の備え

黄熱は日本では流行をしていますが、人の移動にともない、輸入感染症として持ち込まれる可能性があります。

2016年4月には、黄熱流行地であるアンゴラ渡航歴のある中国人が帰国後に黄熱病と診断されています。日本では2014年の西アフリカでのエボラウイルス病、都内でのデング熱、2015年の韓国の医療機関でのMERSアウトブレイクに際して、感染症危機管理について取り組みを強化しているところであります。

今回、報道関係の皆さまと、日本の医療機関における黄熱への備え、輸入感染症の取り組みの情報共有をさせていただくため、下記のようにセミナーを開催することになりました。ご質問・ご意見も歓迎いたします。

日時：2016年7月14日（木） 16:00-17:30（15：30受付開始）

会場：国立国際医療研究センター 国際医療協力研修センター3階 会議室

対象：報道関係者

【注意】事前申し込みは不要です。直接会場へおこしください。

受付で名刺をご提出ください。

カメラが入る場合は事前にお知らせください（場所の確保の関係）

「現在の流行状況：リスク評価」（10分）

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 石金 正裕

「日本に黄熱を持ち込ませないために：黄熱ワクチン外来」（30分）

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 竹下 望 医師

「黄熱をうたがった場合の対応：渡航歴のある症例と初動」（10分）

国立国際医療研究センター 国際感染症センター 大曲 貴夫

全体の質疑（40分）

主催 国立研究開発法人 国立国際医療研究センター

連絡先：国立国際医療研究センター 広報係

e-mail web-master@hosp.ncgm.go.jp

お問い合わせはメールで お願いします

●話題提供者●

石金正裕(いしかねまさひろ) 国際感染症センター 特任研究員(医師)

佐賀大学医学部卒業。沖縄県立北部病院、聖路加国際病院感染症科、国立感染症研究所実地疫学専門家養成コース(FETP)を経て、2016年より現職。医療関連感染症の研究・対策に従事。

竹下 望(たけしたのぞみ) 国際感染症センター 医師

東北大学医学部卒業。横浜市長市民病院、がん・感染症センター都立駒込病院、聖路加国際病院感染症科を経て、2008年より現職。

大曲貴夫(おおまがりのりお) 国際感染症センター長

佐賀医科大学医学部卒業。聖路加国際病院内科、テキサス大学ヒューストン校感染症科、静岡がんセンター感染症内科部長を経て2011年に国立国際医療研究センター 国際感染症センター着任。2012年より現職。

黄熱病とは？ (厚生労働省検疫所FORTHより)

主にネットアイシマカにさされてなるウイルス性の感染症です。

アフリカや南米の特定の地域で流行をしています。通常3～6日の潜伏期間の後、発熱、頭痛、筋肉痛、嘔吐をおこします。一部はそのまま回復します。重症化するといくつかの臓器からの出血や黄疸をおこします。致死率の高い病気です。特別な治療はなく、症状を軽くするための対症療法が行われます。早期治療で体力を保つことが重要です。

2015年12月15日に流行が始まってから2016年6月8日までに、アンゴラでは、328人の死亡者を含む2,954人の疑い患者が報告されました。これらのうち、819人が検査によって確定診断されました。いくつかの地域に予防接種キャンペーンを拡大しているにもかかわらず、このウイルスの感染伝播は続いています。中国では、アンゴラ渡航歴のある帰国者が複数発症しています。



国立国際医療研究センター・職員への取材については、事前に「広報係」へお申し込みをお願いしています。

詳細は下記リンク先でご確認ください。



国立国際医療研究センター
162-8655東京都新宿区戸山1-21-1
電話 03-3202-7181

【最寄駅】 都営大江戸線「若松河田」
東京メトロ「早稲田」